

## 第一回配本】1000年十月刊行 初期江戸読本怪談集

定価：本体一一、〇〇〇円+税  
ISBN4-336-04271-3

【第二回配本】1001年四月刊行予定

ISBN4-336-04272-1

【造本・体裁】

A5判(一一〇×一四八ミリ)、上製布クロス装、美麗貼函入  
本文特漉上質紙使用、各巻平均七〇〇頁

本文十三級一段組、月付付

装訂工藤強勝

所より、燐火屋と燃出て、いともかなしく破る声して、「限なき我を葬るも殺せよな。命を償ひ還せよ」と叫ぶ声、既にいたりて止む。毎夜かくのこし、想ふに是山道より投おとされて死せるものならん。ことにその女警女と覺へたり。はしめのほとは寺中のものも死れ入りいろ／＼話を語し弔ひをなす。とも止ざれは、後にはつねのことにおぼへて、さのみ懼れ侍らず。今宵もかくこそあるければ、かねけしければ、住僧大におどろき「汝か悪行されば已に期年におよべとも、今に怨氣の消散せずして、夜毎に出て命をもとむることを罵る。今宵ぞ僧人に逢ぬれば、定て冥間積鬱の冤屈を伸んとすらん。宿世の業尹いかんともなし難じ」と眉を顰むれば、官治ます怖れ周囲障て、涙を流していふは「此上せんかたなし。今はいかにも御僧をたのみ参らする。偏に我を數ひてたまへ」と膝元朝首、士の礼謹をうしなひて、只頬にたのみけることあわれなり。さすかに住僧も恤みをなし、「さわ」とて官治をともなり、おくの方丈に連行て、盤若心経のまきものおゝくとりいたし、官治が五体を縛り、両三人の僧方丈の前に集り、燈明を照しかる経を声たか／＼と誦あげけり。またきんむらの體なる農夫を招き、おの／＼梯をもたせ、廊裏回廊に充満し、妖鬼來らば防がしめんための用意たり。官治も段々住僧の厚情によって少しく心をやすくし、住僧の世話をいたのもしく思ひけり。

その夜雨はいよいよしく降り、山風つよく吹き、外はもの騒がしき音の葉音、梵の耳にもいざるほどの大嵐。葉音は既に三更を過ぎころ、寺僧兩人につかれはねぶり声に成て、説経も怠り、燈明かけくらく静かになれば、廻廊にあるものども、こなしを曲でうち倒れ前もしらで寝入りたり。かゝる折しも寺のうしるの方に叫ぶ声するに、官治は是こそ冤鬼ぞとおもへば、尚々肝をけし、毛髪、おそれを搔く事限

怪談前席夜話

二四二

【本文細見本】……实物の57%  
<http://www.kokusho.co.jp> E-mail:info@kokusho.co.jp

## 国書刊行会

東京都板橋区志村一一一二一十五番一七四一〇〇五六

二〇三一五九七〇一七四二一

ファクシミリ〇三一五九七〇一七四二七



## 申込書

\*この注文書で最寄りの書店へお申し込み下さい。

◆江戸怪異綺想文芸大系[全5巻](国書刊行会刊)を\_\_\_\_\_部申し込みます。

【取扱書店名】

◆第一回配本を\_\_\_\_\_部申し込みます。

◆ご氏名\_\_\_\_\_ ◆電話\_\_\_\_\_

◆ご住所\_\_\_\_\_

# 徳川文芸の秘奥部を開く文芸資料

『叢書江戸文庫』の刊行開始は昭和62年（1987）であったが、それから13年、新世紀を迎える今ようやく全50巻の完結に漕ぎつけることができそうになった。牛の歩みというが、ここまで来るには、私たちの苦労もなみ大抵ではなかった。また各巻担当の方々がいろいろ犠牲をはらい、苦心を重ねたことを私たちは知っている。しかしそれにも増して、遅れがちなこういう企画の維持に苦しんだのは出版社であった。国書刊行会の我慢と耐久力には、今はただ感謝あるのみである。

\*  
江戸期の注目すべき文芸や資料で、マイナーな位置におかれた為、また翻刻もなく放置された作や冊子を、その伝存をも目的として『叢書江戸文庫』は企画実行されたのだが、その目的はそれなりにほぼ達成できることを喜びたい。しかし同時に、重要な作や冊子で今回の編から洩れたもの重大さにもまた気づくのである。特に近世文芸、近世文化史の研究の進展によって、今まで気づかれないまま散逸しようとしている作や資料が、次々に我々の視界に入ってきた。なかでも江戸期文芸の特徴の一つとなる、〈怪異〉〈綺想〉の根元資料やテキストが放置されていたことを知り、どうにもこのままにしておけなくなったのである。今回、あらたに『江戸怪異綺想文芸大系』全5巻を刊行するのは、そのような文芸資料の集成と普及をかかるものに他ならない。

\*  
国書刊行会の諒解を得て、今回は各巻にそれぞれの編者（複数の場合もある）を立て、また『叢書江戸文庫』とは違って、各巻の収録作を大幅にふやし、書型も変え、全体を特装本として長期保存に耐える刊行物とした。〈怪異〉〈綺想〉を謳ったが、それを超えて近世文化の基本資料となるものを精選している。読者各位の御愛顧を切望する次第である。

東京都立大学名誉教授

高田 衛

監修のことば

## 後世に誇るべき 貴重な遺産

京極 夏彦 小説家



## 江戸の世の ホラー文学

長谷川 強 国文学研究資料館名誉教授



## 秘本への アクセス

浜田 啓介 花園大学教授・京都大学名誉教授



## 後世に誇るべき 貴重な遺産

京極 夏彦 小説家

伝奇小説が静かなブームだそうである。ホラー・ミステリーという括りで紹介される小説群の人気も相変わらず根強い。私達はそれらの潮流を得て海外に求めがちである。確かにSFにしてもファンタジーにしても、その原型を海外作品に見出せるジャンルは少くない。しかし近代以降のジャンル小説の雛形が凡て海外で創られたものとするのは如何なものだろうか。少なくとも私は、小説書きの端くれとして、自作のルーツを海外に見出すことはできない。例えば細かなジャンル分けをせず、それらを「怪異」且つ「綺想」なる大衆娯楽小説として括るなら、その面白さのエッセンスは凡て江戸期に書かれた本邦の創作物に見て取ることができる筈なのである。この『江戸怪異綺想文芸大系』のラインナップを見て、私は益々その思いを強くした。本大系に収められた「怪異」且つ「綺想」なる小説群は、私達が心魅かれ、読み耽り、虜になる一大衆文芸の紛れもない直系の祖といえるだろう。後世に誇るべき貴重な遺産が刊行されることを、心から喜びたい。

秋成を頂点とする前期読本は近時研究の進展が著しい。紹介されることの少なかつ周辺の作者を取上げ、実力が改めて評価された庭鐘に椿園を加え、新資料を用意した二巻は研究の現状の如実の反映であり、古来の故事・金言を原典につかず求められる虎の巻として戯作者に愛用された、これも近時注目を集める和製類書に、奇異談を支える柱の一つの民間伝承、これらを合巻に結実させた京山に光をあてたこの大系は、怪異奇想談の系譜を新しい目で見通し、学界の新動向をも踏まえた好企画といえよう。

『江戸怪異綺想文芸大系』の編集リストをつくづく眺めていると、まるで私自身が編集者であるが、大切なものがまだ残されているような気がしていた。なるほどそうだったのか。特選の怪異文学をこちらの大系で出そうという計画だったのだ。

『江戸怪異綺想文芸大系』の先行作を摂取し模倣・利用して、別趣の展開をはかり特殊な効果を狙う、その繰返しが奇想を生む。模倣・剽窃は低く評価される傾向があり、今回の収録作にもその傾きのある作があるが、近世の戯作はそれを加工する技巧・趣向を感じて楽しむものであり、そういう観点からの文学史の見直しが要請される。このような営みから紡ぎ出された深刻さは、また近時愛好されるホラー文学の淵源としての江戸を改めて認識させるであろう。

近世文学の「怪異」は、民俗に関わり、宗教に関わり、人生觀に関わり、歴史觀に関わるところの、文化史上的一大現象である。開けて見るがない。どんなに面白いことか。かかるにこれらの作品群は、ほとんど未翻刻であつたから、読むのも見るのも容易なことではなかった。今回の大系は貴重な秘本へのアクセスを極めて容易にするものである。この折角の企画が、研究者はもとより、読書人や学生諸君に愛され利用されることを願つてやまない。

推薦のことば



